

健診結果説明は、予防・健康教育を促し、患者とよりよい信頼関係を築くチャンス

宮上泰樹

順天堂大学医学部総合診療科学講座



患者が健康診断や人間ドックの結果を持って病院受診したとき、その解釈や説明に困ることは多いと思います。説明をした際に患者を怒ら

せてしまった、その場で適切な説明ができず後悔したという経験は一度や二度ではないのではないのでしょうか。かくいう私も「大丈夫ですよ、また次の健診で」といった事なかれ主義的な対応をとり、患者とトラブルになったことがありました。

また、外来という短時間で健診結果を把握し適切に回答するのは、かなりハードルが高いと感じます。エビデンスは国内外で異なり、どう回答すべきかわからないことも多々あります。しかも、患者は突然ふらっと健診結果を持参してくるため、予習は全くできません。

しかし、われわれ総合診療医にとって健診結果の説明はとても重要な診療の守備範囲と言えます。知識を持ち、適切な対応を行うことで患者の予防・健康への意識を促す、攻めに転じることもできる場面なのです。そんな「ピンチをチャンスに変えることができる魔法のような本があったらいいのになぁ」と思っていたのが本特集の企画の入り口でした。

本特集では、ありがちなNG対応を挙げ、なぜそれがNGなのか、そしてどう対応すべきかを解説していただきました。若手の読者では先人の失敗から学ぶことができ、また経験を積まれている方には、自身の対応への振り返りや気づきにつながるのではないかと思います。ぜひ1診療部に1冊、健康診断/人間ドックの結果説明で困った時のお助け本として手に取っていただければ幸いです。

G

内藤俊夫

順天堂大学医学部総合診療科学講座



当科では、15年以上前から人間ドックの結果説明を行っています。総合診療医は、臓器横断的に患者を診ますが、そのアプローチは健診結

果の説明やその後の対応に役立ちます。また、普段われわれは、健診異常を指摘された人を受ける側にいますが、健診結果を読み解き、順位付けを行い、その後の方向性を示す、という送る側の経験もまた重要です。

しかし、患者への健診・検診に対する説明は、そう容易くありません。もちろんそこにはエビデンスも重要ですが、患者背景を鑑みる必要があります。医師の説明の仕方次第で、その後の患者のQOLを損なうこともありえます。患者・家族の意思を尊重しつつも、時に「今後の検診は不要」と責任をもって伝える覚悟、そしてそれを受け入れてもらえる人間関係を築いておくことも必要です。つまり、全人的に患者に寄り添う能力が試されているのです。

そこで、本特集では、当院の経験をもとに、①患者・家族からよく受ける質問、②実際に回答に困った質問、について、提示症例の背景を鑑み、また最新かつ重要なエビデンスも踏まえた回答例をお示ししました。

「健診歴」は患者の健康リテラシーの評価指標となります。そして、「健診結果について質問をする」ということは、より自身の健康への意識が高いことを示しており、行動変容を促す絶好の機会となります。この好機を逃さず、患者の予防・健康への意識を高め、その後の診療に活かすべく、本誌をご活用いただければ幸いです。

G